

ハグレモノ共の狂騒曲
(元：夜の兎とはぐれもの)

終日のたり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

舞台は銀魂本編の時間軸から二年後のかぶき町からスタート。

緩く気怠く独居生活をしている神楽の姉（神威の妹）と、その家に突然やってきたゴン・フリークスの日常系捏造連載。

原作の重要伏線の一つである「ゴン・フリークスの母親が宇宙最強の一角だったら」という超ド級のネタです。

言うまでもないですが原作とは完全に切り離して頂ければ幸いです。

Hunter原作が再開して伏線が回収された暁には恥ずかしさのあまり連載事消す可能性も多少あり。

※こんなこと書いた2日後（2022/5/24）に原作者様がTwitterアカウト開設して戦慄してます。

気力があれば続いてもっと気力があれば完結します。タグと捏造とご都合主義は話数とともに増える見込み。

※ゆくゆくはハンター原作に絡めていく想定のため原作をハンターハンターで登録しています。

※ただし全ては気力次第です。

2022/6/26

懲りずにタイトルを変更。なんか書いててちよつと違和感あったので…。

目次

■ ■ ハグレモノ in かぶき町 ■ ■

第1訓：性犯罪者に慈悲は持つな

1

第2訓：人の話は最後まで聞け

5

第3訓：家賃交渉は最初が肝心

10

第4訓：腹が減ったら生きていけない

15

第5訓：草食と温厚はイコールになら

ない

21

第6訓：食い物とギャグは鮮度が命

27

第7訓：若いうちの苦労なんて買って

までするもんじゃない

34

第8訓：大事なものには金と手間を惜

しむな

41

第9訓：報連相は大事だけど取り返し

のつかない報告だけされても困る

47

第10訓：調べ物をネット検索で済ま

せるかどうかで割と重要

53

■ ■ ■ ハグレモノ in かぶき町 ■ ■ ■
第1訓：性犯罪者に慈悲は持つな

宇宙最強といえ、茶吉尼、辰羅、そして夜兔。

戦闘力において甲乙はなかなか付けづらと思うけど、最も攻撃的な外見をしていない（要するにぱつと見弱そうな）夜兔は何処の星に行っても比較的溶け込みやすい。何せ鋭い爪も牙もなければ、体格だってそこまで大きくはならない。勿論個体差はあるけども、宇宙一のえいりあんハンターなんて呼ばれてるうちの父はまあ普通くらいの体格だし、うん年ぶりに再開した不良のバカ兄もまた然り。妹なんて年相応に小柄な方で、地球人の女の子と一見して全く変わらない。でも膂力や胃袋の容量は地球人の平均のウン十倍になるんだから、彼らからすると私たちってのは恐ろしく外見詐欺に感じられるようだ。

まあそれは良いとして。

つまり私が何を言いたいかっていうと、基本的な身体スペックが下から数えたほうが早い地球人の町で暮らす場合、何だかんだで地球人扱い見た目であることはアドバンテージだったこと。晴れだろうと雷だろうと決して手放さない番傘を見て正体に気づ

く人はたまにはいるけど多くないし、気づいた人は大体逃げていくから揉め事にも殆どならない。あとはそこそこに品行方正に過ごしておけば近所のおぼえもめでたくなるし、ちよつと親切にしておけば向こうからお返しがやってくる。これが茶吉尼みたいな外見だったらこの関係を築くにはもう少し時間がかかるだろう。

……ええと、結局何が言いたいんだっけ？

とにかく、そんなこんなで故郷の星を飛び出して数年。私は地球のハプステーションにあたるかぶき町でそれなりに楽しくやっている。ていうか実家もう誰も住んでないしね。お母さん亡くなったし親父は放浪してるし兄は海賊やってるし妹は……妹は働いてるって言うっていいのかな。ほぼ給料もらってないけど住み込みで三食貰ってるらしいし、夜兎の底なし胃袋を満たしてくれてるんだからまあ多少のことは仕方ない。本人も何だかんだ雇い主に懐いてるし。

それにしても妹よ。家出は良いとしてお前無酸素・無防備状態でシャトルにしがみついたまま無断渡航とか本当に無茶やったな。私どころかあの無鉄砲クソバーサーカーの兄もやらなかったよそんなこと。せめてもつと頻繁に手紙でも出してれば家出前に連絡くらいくれたんだらうけど、あの頃は私もあつちこつち点々としてたからなあ……届かなかった手紙も多分あつたらうし、そりゃ神楽も私に頼ろうとは思わんだらうな。ダメな姉ちゃんでごめんねホント。再会早々「クソ姉貴」とか、神威みたいに呼び捨て

か呼ばれなかったのが奇跡だね。

……違う違う、今は懺悔したいわけでもなくて。

まあとにかく、私たち夜兎つてのは基本的に見た目詐欺だ。地球人とそっくりな外見、といえば地球人を知ってる天人からすると「うっわよわそ」ってなる。実際は筋骨密度から内臓の強さからそこから来る膂力は地球人とは比較にならないんだけど、とにかく見た目はそんなもん。あと美醜の感覚も地球人に近い。名前に【夜】がつくところからもわかる通り日光っていうか紫外線に強くないから夏とかは天敵なんだけど、ぶっちゃけそれ以外に弱点らしいものはない。しいて言うなら基本的に戦うの大好き殺し合い大好きで自分から滅亡に向かつて突っ走りがちなのが最悪の弱点。だからもう数殆どいないしね。

で、この見た目はさつきも言った通り他の惑星、特に地球に溶け込むにはとつてもアドバンテージが高いんだけど、逆を言うと普通の地球人にしか見えないからろくでもない奴らに目を付けられることも多い。いやホントに。自分で言うのもなんだけど私は（というか私たちは）絶世の美女だった母親譲りの顔をしてるし、見た目詐欺が働いてて全く力自慢にも頑丈そうにも見えない。

ただの華奢なチャイナ服の小娘と思われて痴漢や変質者や露出狂に遭遇したり、銀行強盗に出くわして人質に指名されたりすることもそこそこある。どつかの日本のヨハ

ネスブルクみたいな治安と言うなかれ、かぶき町は基本的に何でもありで治安が悪いんだ。むしろ二年前と比べればかなりマシになった方。テロが減ったからね、テロが。

まあ私だつて腐つても夜兎の一員、人質取られようが人質になろうがちよつと武装した程度のいきり犯罪者どもに負けることはない。でもだからといって、そういつたことに巻き込まれることに辟易しない、というわけではない。外見で舐め腐られるのは普通に腹立つし、時間と労力を浪費させられるつてのは不毛すぎて毎度うんざりする。

……とまあ。前置きが長くなつたけど、要するに私が言いたいのは「懺悔はしなくていい。黙つてテメエの罪を数えろ」

どんな手品を使ったのかはこの際どうでもいい。風呂上りのタイミングで突然脱衣所に現れた浮浪者にかける慈悲はないってこと。

「ちよ、待」

「死ね」

地球人の来てる着物に袴みたいな服装にターバンぽいものを頭に巻いた変質者の首目掛け、私は愛用の傘を薙ぎ払つた。

第2訓：人の話は最後まで聞け

「ほーん？　つまりテメエはつい数秒前までなんちゃら遺跡のほにやらら石板とやらを調査しててそこにはテメエもテメエの仲間もいて？　だから私の風呂を除くつもりはおろか人様の家に侵入した記憶もなけりや意図もなくて？　完全に事故だし見るつもりもなかったから許してほしいと？　ほーん？」

「その通り」

「死ね」

わざとじやないですべてがまかり通るんなら警察も裁判所も弁護士もいらねーんだわ、ボケが。

「つつつぶねーなオイ!!　なんでモーションも殺気もなしにこの威力が出せんだよ!!」
くつそよけやがった。最初の一撃は当たったのにな。まあガードされたんだけど……あのタイミングで仕留めそこなうとか私もしかして鈍った？

「いつってエ……くそつ、なんだこの威力……【堅】でガードもしたつてのに……」

とはいえ流石に無傷では済まなかったらしく、変質者がギリギリで首をかばうときに犠牲にした左手の甲の骨はしっかり折れてるし皮膚青黒くなっている。なんか知らな

い単語がブツブツ出てきたけどこれって聞いた方が良いんだろうか。いやどうでもいいのか変質者の戯言だし。

「よし死ね」

「ふざけんな!! つーかお前さつきから二言目には死ね死ねってそれしか言えねーのか
オイー」

「変質者とか性犯罪者に基本的な人権を認めるの反対なんだよね、私」

「だから変質者じゃねえっての!!」

オレはれつきとしたハンターであって断じて覗きなんか意図してねえよ!!

がおがおと喧しく吠える自称ハンター○変質者……ハンター?

「こんな市街地のご真ん中でえいりあん狩り? せめてもつとターミナルに近いところ
にすべきでしょ。言い訳ならもつとまともなこと言え」

「あ? エイリアン?」

「ハンターつつつたらえいりあんハンターでしょ。まさかトレジャーハンターとでも?

もつとおかしーだろがクソ豚野郎少しは考えてから物言え」

「うおあ!」

つたく今日日の変質者はまともな言い訳もできんのか。

「だからオレは変質者じゃねえ!!」

うるせーなこの野郎。二度と同じ真似できねーように金玉潰してチンピラ警察に突き出してやるよ。

一つ星ハンターのジン・フリークスといえば、その功績や肩書は枚挙にいとまがない。歴代最強と呼ばれるハンター協会会長のアイザック・ネテロから「世界で五指に入る念使い」とまで称され、その狩の幅は制限がない。遺跡の発掘、盗賊団の討伐、希少種の発見と保護、エトセトラエトセトラ。

近しいものからは自由気まま（と書いて自分勝手とも読む）で奔放かついい加減な性格から煙たがられることも多いものの、唯一の弟子や目的の一致から関わった者からの信頼はこの上もなく厚い。数年先の未来では申請が面倒だからという聞く人が聞けば横つ面を殴りたくなるような理由で三ツ星ハンターの座を蹴り続けるようになる彼は基本的に根無し草の生活を送っており、二年に一度程度出れば多い方である『行方不明プロハンター』に数えられる常連だ。

権力に阿らず拘らず、誰に対しても多くの場合において不遜。仲間としてつるめば最高の相手だが、規律のある組織の中では目の上の瘤扱い。自身の興味と好奇心の赴くままに行動する彼であるが、しかし人間として、というか社会的な動物として一定の倫理

観は一応備えている。そしてゲロ以下の下劣な行為に嫌悪感を抱く程度にはモラルもあつた。

何が言いたいかというと、間違つてもうら若き女性の家に不法侵入したり（それなりの理由がある場合は除くが）、ましてや覗きなどといった卑劣な行為を率先して行うような人間ではない。しかし、彼と全く面識がなく、また実父や実兄やチンピラ警察の局長とかいてストーリーカーと読むゴリラなどなどの影響で男性というものに一定の不信感を持つている少女に対し、それを理解させるのは至難の業であつた。

「よし分かつた。仮に、ほんつとーに仮定であんたが遺跡だか廃墟だかの調査中に事故か何かによつて今この場にいるとしてだ」

「……………おう」

「あんたは一体どこの誰で、いっどうやつてどの星から地球に來た。夜兎族^{わたし}相手にそんなだけ立ち回れるくせに侍でもないあんたが地球人だとは流石に思えないんだけど」

「はぐ。」

「見た目は明らかに地球人だけど明らかに身体の造りが私ら寄りだよ。なのに日焼けはしてるし傘も持つてない。髪の色だつて夜兎の色じゃない。おまけになんか変な技も使う。あんた一体何？」

そして何とか「不審者でも性犯罪者でもない」という言を受け入れさせたその先で、今度は全く別ベクトルの疑いをかけられる。『チキユウジン』という単語に聞き覚えのないジンであったが、それでも自分がある種「人間かどうか」の疑いをかけられるのは流石に初めてだった。

第3訓：家賃交渉は最初が肝心

しどろもどろになったり喚いたり叫んだりとにかく喧しく自分の無罪を主張するこのジンという野郎は、どうやら違う惑星ないし違う次元から事故でここにやってきたらしい。

……もつとうまい言い訳をしろよ、と拳を握った私を責める者は多くない。何せこっちは不慮の事故だとしても素っ裸を見られてるわけだ。この年になって恋人の一人もいないからこそそれなりに身持ちを堅くしてんだよこっちは。

が、ジン曰く、彼は世界中を旅しているにも関わらず天人を見たことがないと言いつ張つて、自分が持っていたポロポロの財布から通貨を取り出して広げ、数少ない荷物から地図を引つ張り出し、直前まで発掘してたつていう遺跡を背景に仲間と撮影した写真を私の鼻先に突き付け、今じゃほぼ誰も使用してないガラケーまで私に渡してきた。これ私が壊してもしたらどうする気だったんだらうね。壊さんけど。

「……何この文字」

「やっぱ読めねーだろそれ。ハンター文字つつつてな、オレのいた星だか次元だかじゃ世界共通語になってんだよ、これが。どこ出身のガキでも大抵は読めるし書けるもん

だ」

「……………ぶーん」

頭のおかしい異常者の戯言で片づけするには、まあ確かに色々揃いすぎてる。それに何より、脱衣所に現れる本当にその瞬間まで、いくら気を抜いてたとはいえ私がこいつの存在に気付かなかつたつてのが……まああり得そうだけど大体おかしいのは事実。

いくら基本的に戦線から遠ざかつてても私だつて夜兎の端くれ。えいりあんやら何やら相手に妹と駆けずり回ることだつて少なくないつてのに。

……まあこいつ相手なら多少はありそうなんだよね。完全不意打ちだった私の殴打をガード出来てんの、普通にやばい。銀ちゃんだつて気を抜いてりやぶつ飛ぶのに。まああの人は基本気が抜けてるけど。

「一応聞くけど、ここは惑星地球、日の本の国、江戸のかぶき町。心当たりは？」

「ねえな。この家の造りや外の風景がジャポンつて国に似てるとは思う」

「天人、宇宙人は身近にいなかったつて？」

「ああ。つーか、もしんな奴らがいるつてわかつたらソツコー出向いてたつての。宇宙人だぞ？ オレ、まだ宇宙には行ったことねーんだよな」

暗黒大陸もまだだしな、とぼそつと付け加えられたけど何だそりや。

「ちなみに私も宇宙人なんだけど」

「お前が？　嘘だろ。いや嘘じゃねーか。この見た目であのゴリラ力だもんな」

「誰がゴリラだ殺すぞ」

「だからいちいち傘振り回すな!!」

うるせーハゲ。うら若き乙女をゴリラ呼ばわりする命知らずの命を狩って何が悪い。

「ハゲでもねえのにハゲとか言うな！　マジで薄くなったらどーすんだよ！」

「心配すんな。海藻食おうがストレスフリーだろうがハゲるときゃハゲんのが生き物だよ」

うちの父親とかな。……いや父さんはそれなりにストレスあった人だったな。母さんは早死にしたし兄も私も妹もああでこうだし。

「オレ達が発掘してた遺跡ってのが、七千年前に突然都市ごと消失したって言われてフィクション扱いされてたモンでな。五年前にその残骸っぽいのが見つかって、交渉だの人集めなので駆け回ってやっと先月発掘開始できたんだ。それで水路や貯蔵庫の痕や人為的な落書きも見つかってな。続けて本丸っぽい地下神殿の入り口を見つけたのが二週間前。準備整えてやっと入り口をこじ開けたのが一昨日。一番奥にたどり着いたのがつい三時間前だな」

ふーん。

「言っとくがそっからの三時間は調査じゃなくてお前から逃げ回ってた時間だからな」

「変質者の尋問に三時間も使っちゃったの私。時間の無駄遣いやばいね」
「だから変質者言うな」

うるせえ浮浪者みたいなカツコシやがって。銀ちゃんだってプータローだけど普段からそれなりのカツコシしてんぞ。

「誰だよ銀ちゃん」

「うちの妹の雇用主。万事屋銀ちゃんのオーナー。天パ。糖尿予備軍」

「最後の二ついらねーだろ」

いやある意味そこが銀ちゃんのアイデンティティーなんだけど。

「で、自称異次元だか異世界だか出身のジンさん。あんた元の場所に戻る算段はあんの？」

「んなもんあったらとつととこつから逃げてるつつの」

「だろうね」

見たところこいつ腕つぶしは申し分ないし口も立つし、無一文で常識皆無な今の状態でもどっかの誰かを誑し込んで普通に生きてけるタイプだ。それでも私相手に左手骨折してまでここに残ったのは（こいつの言葉を全部信じるならだけど）、遺跡から転移した先であるこの家付近に留まり続けることが現状最善だからだろう。

フィクションでもよくあるよね。特定の井戸からタイムスリップしたり同じ本から

その世界に行ったり。今回は井戸も本もクソもなかったけど。

……………んー。

「さっきの」

「あ?」

「さっき私の傘を防いだやつ、私も練習したら出来るようになる?」

「あ? ……あー、まあなるんじゃない、多分」

よし、なら話は早い。

「左手の治療代と、完治するまでの三食と寝る場所を提供する。あんたの外出は制限しないし、犯罪以外の行動ならとやかく言わない。他に拠点を見つけたらいつ出て行ってもいい」

「その代わりに【念】を教えろってか」

「ネンっていうのがさっきのやつならそうだね」

理屈も理論もさっぱりわからんけど、アレがあれば次に親子喧嘩（または兄妹喧嘩）が勃発しても割って入ることくらいは出来そうだな。

なんせあの時は全部妹に任せっぱなしになっちゃったからね。あの子はなんも気にしてないけど、一応姉としてこれ以上あんまり不甲斐ない様は晒したくないんだ。

第4訓：腹が減ったら生きていけない

ひとまずぼつきり折ってしまった手の甲を家にある道具で固定して包帯を巻く。今日あたり熱が出そうだから解熱剤も出しておく。地球人相手なら病院なんだけど時間的に緊急外来以外はもう閉まつてるし、救急車とか呼んで身元を確認されるのはちよつと拙そうなのでやめといた。あとなんか本人も病院はいらないつつつてるし。

「手慣れてんなア」

「身内がよく怪我してたからね」

主に兄弟喧嘩でだけど。

「来客用の布団はないからしばらく寝袋使つて。寝室も余分なのはなから寝るなら押し入れね」

「押し入れって人間が寝るとこじゃねーよな確か。つか布団あんじゃねーか」

「それは来客用じゃなくて遊びに来た妹用。髭のオッサンに無許可で使わせるモンじゃないの」

「誰がオッサンだ!」

オレはまだ十九だ!! と吠えるおっさ……もといジン。

「ティーンにとつての年上なんてみんなオッサンだよ」

「俺もそのティーンだつたの。つーかお前幾つだよ」

「十八」

「一個違いじゃねーか」

その一個が大きいんだよ、と言う代わりに肩をすくめると「マジかわいくねえこいつ」みたいな顔をされた。失敬な。私の顔面は母さんに生き写しだ。

「ていうかオッサンじゃないってんならその無精髭どうにかしたら？ そのツラ許されるの三十路からでしょ」

「うるせえ。発掘現場に髭剃りなんか持ってこれるか」

「へーそーなの。生憎考古学にも学術調査にも縁がない人生なもんで」

とりあえず安全カミソリくらいは買ってくるかな。電動髭剃り？ ンなもん自分で金稼いで買え。

「どこ行くんだよ」

「買い物」

食料品が足りないんだよ。あと日用品もね。歯ブラシとタオルとパジャマくらいは最低でもいるでしょ。

「オレも行く」

「えー」

「えーじゃねえ。オレの外出は制限しないんだろが」

誰だそんなこと言ったの。私か。

「早まったかな」

「そーかもな。オラ早く行こうぜ。ついでに道案内しろよ。図書館とか公民館とか駅とかな」

「何そのチョイス」

「情報収集」

何の、って聞くのは流石に野暮か。一応別世界に来ちやったーみたいな危機感はあるらしい。全然動じた様子はないけど。

「んじゃ荷物持ちくらいはしろよ」

思いっきり嫌な顔してくるんだけど。マジ何様だこいつ。

町並みは昔訪ねたジャポンそのもの、なのに道行く奴らの半分は魍魅魍魎。顔つきも大きさも手指や肌の色さえ大きく違う連中が当たり前前にその辺を歩き、口を開けば同じ言葉を喋っている。

町の中央にそびえているアレは何だと尋ねれば、「ターミナル」と短い回答。宇宙人……天人がこの星にやってくるとき、そしてこの星から飛びたつときは必ずあそこから出るらしい。当然金にかかるらしいが遊覧船みたいなもんもあるようだ。

「なんだそれ乗りてえ」

「自分の金でどうぞ」

振り返りもしない女は相変わらず味もそっけもない。まあ必需品じゃない娯楽のためのお金まで出したくないってのはそうだろう。

「そーいやお前、仕事何してんだ？」

この世界に「ハンター」はいない。フリーのエイリアンハンターやらトレジャーハンターやらはいるらしいが、ジンたちにとってなじみ深い「ハンター」という職種はないようだ。

「定職って定職にはついてないよ。天人で未成年だとあんまり何処もいい顔しないから。でも顔なじみはそこそこできてるからその店で働いてる」

「へえ、何の店？」

「キャバクラ」

「は!？」

「何。言っとくけど客引きもしてないし酒もたばこもやってないよ。たまーに知り合い

が客で来た時にヘルプ入るけど基本は裏方だしね。あとは妹の居候先の大家がやつてるスナックとか、その隣の花屋とか、あとは有志のえいりあん討伐でしょ、銀ちゃんところでもたまに一緒に仕事するし、それから……」

「ふり幅がデカすぎんだろ」

とりあえず節操なしに働いてるってことはよくわかった。ジンが言えた義理ではないが、酒もたばこも変な薬もやってないなら別に咎める事ではないだろう。なおジンは酒でもたばこでも危ないお薬でも、その国で合法であれば基本的に試す性分なので本当に人のことは言えない。

「今のオレの立場でも雇うようなトコがありやいいんだが」

「あるでしょ幾らでも。かぶき町を何だと思ってるの」

「知らねーよ。お前から聞いた情報しか今は持つてねーんだよこっちは」

「心配しなくても二年前に不法入国した妹が我が物顔で暮らせてる街だよ、ここは」

「それはそれでどうなんだよ」

戸籍も身分証明書も常識もないジンにとっては都合の良い環境なのは間違いないが、正直だいがカオスだ。聞いてるだけで面白くもあるが。

「ここ行きつけのスーパーね。基本ここと斜向かいにあるドラッグストアが激安競争してるから広告見て安い方で買う。荷物持ちよろしく」

「へんへん」

屋根瓦や漆喰の壁は物珍しいが、スーパーだと指さされた店の構え方や雰囲気は見たものときほど変わらない気がする。ジンはそもそもスーパーで買い物した経験自体ほぼないが（何せ自炊経験自体がほぼゼロだ。野宿した先での食料の現地調達と調理は自炊とは一線を画す）、流石にそのくらいはわかる。

慣れた様子で買い物籠を二つカートにセットする少女の後ろから除いた青果売り場には、面白みのないことに見知った野菜や果物が多かった。ニンジン、キャベツ、白菜、ジャガイモ、玉ねぎ、トマトに茄子……。

「って待って待って待ってどんだけ買う気だよ！」

「一週間分」

キャベツの大玉五つも何に使うというのか。当たり前のように自分の頭くらいある野菜を籠に放り込む少女は煩わしそうにジンを见やる。

「うるさいなあ。っていうか何でお前手ぶらなんだよ荷物持ちしろっつったろ」

「うおっ」

投げつけるように籠を渡されたと思えば、間髪入れずにカボチャを三つも投入される。足が速い野菜だけでも既に籠二つ分も買い占める少女に戦慄したジンは、その数時間後に披露された夜兎の底なし胃袋にますます慄くこととなる。

第5訓：草食と温厚はイコールにならない

「食いすぎだろお前」

「よく言われるけどお前にだけは言われたくない」

夜兔の私はさておき、私の三分の二程度の量は遠慮なく胃袋に収めたジンという男は、自分のことを棚上げして引き気味にこつちを見てくる。言っておくが私はこれでも小食な方だ。妹なんか凄いで。なんせたくあんだけで五合炊きの炊飯器空にするからな。

「つーか食う割に野菜ばつかなのな」

「肉より好きなんだもん」

というか肉と魚がそこまで好きじゃない。あ、卵は好きだな。麻薬卵の在庫そろそろ切れるしまた作り置きしないと。

それにしてもこの男、折つたのが利き手じゃないとはいえ器用にご飯食べるな。荷物持ちも全然苦じゃなかったみたいだし……こいつの周りつてみんなこいつみたいない感じなんかね。だとしたら怖いな異世界。

それにしても。

「なんか全然焦燥感がないけど、戻る宛があったりするわけ？」

やけにどっしりというか太々しいというか。どこぞの三文小説よろしく「異世界から来ました☆」みたいな状態なのにこいつのこの落ち着きっぷりは何なのか。普通もう少しパニックつたりするもんじやないの？ 他に異世界から来た（自称）奴なんて知らないからわからんけどさ。

「あ？ ンなわけねーだろ。完全に予定外の予想外だつつの」
「その割にや落ち着いてるね」

なんなら楽しそうだ。買い物行く道中も鼻歌交じりだったし、なんならレジ待ちの列で全然面識がなかった天人に話しかけて盛り上がった。控えめに申し上げてコミユ力がやべえ。

「予想外で予定外だからこそだよ。そりや最終的に元の世界つつーか、発掘現場に戻るのが目的だ。だからこそその目的を果たすまでの道中は目いっぱい楽しまなきや損だろ。なんせ普通じゃ味わえねえ環境に違いねえんだからな」

明日はターミナルとやらに行ってみるわ、と続けるジンは確かにティーンの顔をしている。むしろ中坊みたいなはしやぎっぷりと言つていい。目えキラツキラしてる。これで無精髭がなけりやマジでただの学生だ。修学旅行先で木刀買って仲間内でバカ騒ぎするタイプの。

「お前職場の上司に嫌われるタイプだろ」

主に規律を乱すって意味で。そんなもって無駄に仕事の出来とコネの作り方が良くて首にできにくいタイプの。刑事もののドラマとかに出る「普段は窓際だけど推理力が一流でどこからともなく難事件を解決する」タイプ。そら手綱なんか握れるわけねーわ。

「外出は自由つつつたけどネンとやらは教えて貰うかんね」

「んな約束したっけ？」

「よし次は反対側の手だな」

「冗談だっつの」

嘘つけ半分本気だったろ今。

「つーかお前、教えろったって半分くらいもう使ってたぞ今。じやなきや適当とはいえガードしたオレの手がこんななるわけねーだろ」

「は?」

「やっぱ無意識かよ。まあオーラ自体は見えてねーのわかってたけどな。お前、オレを殴るときにガツツリ肩回りから腕まで強化してたぜ? へったくそな【凝】もどき、まあ【練】だけだな。それもオーラの量でごり押したタイプの」

「ビギナーにおもつくそ専門用語で喋るのやめてくれる? 説明下手な大学教授かよ」

「お前のその具体的なのか回りくどいのかわからねえたよえは何なんだよ」

はあ、と大仰にため息をつくところ悪いけどため息つきたいのはこっちなんだよね。はっ倒してやろうか。

「念つっーのはオーラを使いこなす念能力のこと、オーラはぎっくり言うと生命が持つエネルギーだ。生きてるもんならその辺の草だろうが野良犬だろうが人間だろうが持っている。これを使いこなすことで身体能力を大幅に上げたり超能力みてーな力に身に着けられる。っーかオレ達の世界じゃ超能力者イコール念能力者だ。霊能力者とか仙人とかも全部な」

「超能力ねえ」

つまりこいつら基準だと結野家みたいな陰陽師たちも念能力者ってことになるのか？ あと木刀一本で真剣と張り合える銀ちゃんも自覚はさておき念使ってることになる感じ？ ……思い返してもそんな風には思えないけど、でも銀ちゃんだしなア。

「このオーラは普通の人間にや見えねーし垂れ流し状態になってんだが、体中の精孔を開いてオーラ自体の出力を増やしつつ、自分の周りにとどめて制御するのが念能力者の第一歩だ。……っーわけでとつとと後ろ向け、後ろ」

「後ろ？」

「首だけじゃねえよ、体ごとあっち向けての」

しっしつと「あっち向け」どころか「あっち行け」のジェスチャーかます無精髭に背中を向ける。一体何考ええ

「どわっつ?!」

「おー、思った通り開くの早えな。この程度で全開か」

待て待て待て待て待て何これナニコレナニコレ?!?!

毛穴よりもっと細かい小さな穴が全身に開いて!そこから湯気がもうもうと出てるといったら多少は的確になるんだろうか。温度はわからないのに熱いような冷たいような感じもするし、寧ろ痛みもないのに同じ量の血液が出てるみたいな、

「言い忘れたけど、それ早く周りにとどめねーとそのうち死ぬぞ」

やっばりかクソが!!!!

「殺す気かア!!!!」

「おっと」

全身全霊でひっくり返したちやぶ台は見事によけられた。ニヤニヤ笑うその顔の憎たらしいことつたららない。

「ぶっ殺す!!」

「おーおー活きのいいことで。まずは【纏】が出来るようになってから言

「死ね!!!」

「嘘だろおい?!」

フェイントもクソもないストレートパンチは皮膚一枚かするだけで終わった。このマダオの素質満点のクソ虫ぜってーそのうち泣かす。

第6訓：食べ物とギャグは鮮度が命

「んー、まあ今日はこんなもんでいいだろう」

見た目通りというか見た目以上というか、とにかく口で説明するより「見て盗め」つー昔気質の職人みたいなタイプだったジンの適當極まりない指導のもと、とりあえず【纏】については及第点が出た。らしい。

欠伸して目に涙まで浮かべてるジンはもう今日はお開きにする気満々ぼいんだけど、私的には全く納得できない。

「あんたと全然違うじゃん、これ」

精孔とやらが開いて見えるようになったからわかる。同じ【纏】でも私とこいつじゃ全然精度も密度も違う。私なんか体の周り20センチにとどめるのがやつと気を抜くとどつかから穴が開くの、ジンの【纏】はそんなそぶりもない。私がせいぜい切り取るのに失敗して破れたりひしゃげたりしたラップなら、こいつはびっちり隙間なく張ったスマホの画面保護カバーだ。マジでこれだけでレベルが違う。

「つたりめーだろ。こちとら才能と年季のダブルコンボなんだよ。そう簡単にマネされてたまるか」

「しれっと自分を天才呼ばわりしてんじゃねーよ自意識過剰か」
「ただの事実だ」

嘘こけ。と言いたいとこだけど多分本当だと思う。こと喧嘩やら戦闘やらじゃ一番の落ちこぼれとはいえ、星海坊主とあの戦闘狂を身内に持つだけあって私の観察眼もなかなかのものだ。こいつならバカ兄とも素面で殴りあえるだろうし、多分なんなら兄貴よりも強い。こいつがここにいる間、鉢合わせにならないことを祈ろう。

「ちなみに念能力者なら寝てようが飯食ってようが〔纏〕は無意識レベルでできてんのがフツ―だ。まあ頑張れよ」

「いちいち本当にむかつくなお前」

今からでもたたき出してやるるか……いややめとこう。今日教わったのマジで基礎の基礎レベルみたいだし、追い出して契約を反故にしたら長期的に損すんのは多分私だ。

何よりこいつ、ちよつと一緒に出掛けただけで地球人と天人あわせて七人も知り合い作ってたようなコミュ強野郎だ。こいつなら私に追い出されてもそのまま今日縁を結んだ誰かの家に転がり込めば事足りてしまう。見たところサバイバルにも慣れてる臭いし、チンピラ警察24時に連行されても雨露しのげる場所に行けたって喜びそうだ。

……腹立つわー。なんかめつちや腹立つ。

「おい」

「なに」

「鳴ってんぞ、外」

「んあ？」

ジンが指さす先を見れば、ちかちかと点滅してるドアモニターのランプ。……ああもう。いつもなら入り口に立たれる前に気づけるのに。

「こんばんは」

「珍しいね、いつもならここちが来る前に開けてくるつてのに」

黒い着物を着こなして、髪もしっかり結ってる様はおきやんを通り越して粹って言葉が相変わらず似合う。年を取るならこうなりたいなつて前にボソツと言ったら「あんな男か女かわかんねーババアが良いわけ？ 絆創膏貼る？ 頭丸ごと包めるうくらいでつかいやつ」と真顔で銀ちゃんに言われた記憶が蘇った。わかってるけど失礼だよなあ的那天パ。

「ちよつと話し込んで。すいません」

「いいよ別に。それよりほらコレ。知り合いが送ってきてね」

「わ、ありがとうございます」

渡されたのは新聞紙に包まれたタケノコ。新鮮なやつだ。明日はこれでお刺身作ろ

う。残ったら煮つけだ。それが一番シンプルで美味しい。

「いつもすみません。対して何もお返しできてないのに」

スーパーで買おうと思っても水煮しか大体ないし、刺身にできるような新鮮さは期待できない。晩御飯済ませたのにお腹空いてきちゃうな。

スマホを確認したらまだ夜の二十二時。よし、明日まで待つのはやめた。夜食にしようしようしよう。

「……アンタはちゃんと気遣いが出るいい子だねえ、妹にちつとばかし分けてやれなかったのかい」

「神樂はあの大らかさが持ち味ですから」

「だからって人ん家の炊飯器を一日七回も空にするのはどうなんだイ」

「それはもう個性っていうか生態系っていうか」

夜兎だからね。

「ま、その妹とあのちやらんぼらん共の分は別にあるから、あんたはそれしつかり食つきな。連れもいるみたいだしね」

「連れって。誤解ですよ」

玄関口においておいたジンのブーツはどう見てもメンズだ。お登勢さんは目ざとくそれに目を落とすと、次に私を見てウイंकを飛ばしてくる。とんでもねえ勘違いだ、

マジやめてほしい。

「こつちじゃないのかい？」

小指を立てるな。

「ただの居候です。ちよつとまあ、色々あつて」

「ふうん？」

流石に異世界云々は私の口から言いづらいし、かといつてジンが突然脱衣所に現れたことだけでも云つたら警察に電話されかねない。

「まあいいさ、あのチャイナ娘には自分から言うんだよ」

「だから違いますって」

あこがれはしてるけど、この人っていうか、かぶき町の年配女性のこういう酸いも甘いも噛分けたが故の変な気の回し方は苦手だ。根掘り葉掘り聞いてこない分お登勢さんは気が楽だけど、だからって痛くもない腹を探られるのは好きじゃない。

にやりと笑つて去つていくお登勢さんが戻つてこないのを確認してドアを閉める。なんか疲れた。でもタケノコは嬉しい。

「……………」

「何、人の顔まじまじと見て」

「別に」

「あつそ。んじやジン、あんた暇ならこれ下処理してよ。皮剥いて手ごろな大きさにぶつ切りするだけでいいから」

「あ？　なんだそりや……タケノコ？」

「今貰つたの。流石に包丁くらい使えんでしょ」

「なんでオレが」

「はーん、こいつ鮮度抜群で旬のタケノコ様のうまさを知らないな？　そうかそうか、そりや勿体ない。」

「いいからやってよ。その間に私ご飯炊くから」

「今から食うのかよ!?!」

「そうだよ。これ真面目に鮮度が命なんだから。明日になったら生食はもうダメかもしれない。あ、やっぱ半分は薄切りにして。刺身だから」

「わかつてたけど人使い荒エなおい」

「やかましい。タケノコ様を食った後もう一度その口で同じこと言ってみろ。」

「なんつだこれ美味えな!?!」

「ほれ見たことか」

タケノコ様は刺身にしてお醤油とワサビで頂くのが至高。天人が割と引つ掛かるワサビの辛さも口に合ったらしいジンに思わず笑う。なんか懐かない犬を餌付けしてる

気分だ。同じ犬なら定春のがウン万倍かわいいけど、変に無邪気な印象を受けるのは私
が絆されかけてるってことなんだろうか。

第7訓：若いうちの苦労なんて買ってまでするもんじやない

「気が変わった。やっぱお前も明日来い」

一人暮らしの狭い1LDKルームに突然同居人が現れて早二週間。そろそろこいつの突拍子のなさにも慣れてきたつもりだった私でさえ呆気にとられるようなことを言ったジンは、当たり前前のようにもう旅支度（頑丈そうだが小汚い鞆ひとつ）を整えていた。

文字通り降ってわいた同居人ジン・フリークスは、初日で私が受け取った印象以上に気ままで勝手に自由で適当だった。そのくせ妙に人懐っこいとか人たらしで、媚びを売るのは対極的なのに気が付けば何処かで友達を作ってる。その友達に面と向かって「嫌い」と言われるのに人格や実力を認められて信頼を勝ち取る。不必要に好かれるように難しいことを当たり前前みたいにやって、ここにきて二日目には私が言い出しもしなかったスマホをゲットして（「オレらが持つてるよりだいぶ多機能だな」と喜んでた）、日雇いか何かでお金を稼ぎ、仲良くなった誰か（恐らく天人）に持たされたで

あろう土産を広げて見せた。

「お前マジなんなの」

「さアな。おい【練】緩んでんぞ」

「へーへー」

意識的に毛穴、じゃない精孔を開いてそこから汗を流すようなイメージを作り直す。見えるようになった薄桃色っぽいオーラが鋭さと厚みを増していくのはわかる。わかるんだけど慣れない。もう何分経つたんだ？ これどのくらい続けりゃいいの？

「最低でも三十分な。速戦即決できりゃその限りじゃねーけど、そもそもお前スタミナあんだからそれに合わせて絞り出せるようにしねーと勿体ねえんだよ」

「スタミナあるかなあ？ 身内が全員お化け過ぎていまいちピンとこないんだけど」

一番身近なところでいうと妹の神楽。燃費は悪いけどその分元気な時はいつまでもどこまでも動ける。昔からあの子の遊びに付き合おうと私の方が早くバテるのはお約束だった。よく「ねーちゃんすぐ疲れるからつままないアル」とか無邪気に言い放たれて傷ついたつけないア……。

「次もつかい緩んだら冷蔵庫のダッツはオレが食うからな」

「ふざけんな殺すぞ」

「気合入っただろ？」

「泣かすぞこのヒゲ野郎」

「あだあ!!」

衝動のままにとりあえず目についた太い毛を引っこ抜いてやる。……ゴミ箱どこだ
ゴミ箱。

「いつてえなマジで抜くなよ!!」

「うるせー。テメエのヒゲ見ると近所の公園でたそがれてる長谷川さん思い出すんだ
よ」

「誰だよハセガワって!」

「元祖マダオだよ言わせんなもっかい抜くぞ」

「やめろ!!」

勢いよく距離を取るジンは涙目になってるがまあ別にかわいくはない。ていうかお
前金が出来たんなら髭剃りくらい買えよ。

「うるせーな。別に困らねえんだから良いだろ」

「現在進行形で抜かれてるのに?」

「お前が抜かなきゃいい話だろうが!! ……つと、おい時間だ。解いていいぞ」

「ういっす」

はー疲れた。いやホント疲れた。ぐっと全身から力を抜いて【練】を【纏】に戻す。聞くとところによると【纏】でオーラをしっかりとどめておくことで所謂アンチエイジング効果も出るらしい。まだティーンとはいえ日焼け止めしっかり保湿しかり、今のうちにやっておかないと三十過ぎてからガクツとくるそうだから気を付けておくに越したことはない。

「しっかしアレだ。【纏】と【絶】に比べて【練】にムラがありすぎんだよなア……最初にオレの骨折ったときみてーな爆発が常に出せてりや言うことねえんだが」

「そりゃ不審者という名の覗きに対する殺意を普段から出せるなら苦勞しないよ」

「だから覗いてねーつつのいい加減にしろ。大体ゴリラの裸なんか見て何が面白ぶへら!？」

誰がゴリラだ殴るぞ。

「もう殴ってんじゃねーか!!」

「喧しい。……さてアイス食べるかな」

「オレ、チョコモナカビッグな」

「自分で取れ」

別にいいけど。自分用のカップアイス（抹茶）とその半分の値段のモナカアイスを取って後者を投げ渡す。あー優しいな私。こんなに優しいからこいつも日に日につけ

あがるんだらうな。

「優しい奴はこんなすぐ手は出ねーよ……」

「なんか言った？」

「イイエナニモ」

わざとらしく上擦った声で返すジンがむしやむしやとモナカアイスを食べつくす。早えなオイ。私を買ってきたやつだぞもつと味わって食え。

「お前だつてオレが貰ってきた焼き鳥速攻で溶かしたじゃねーか」

「ゴチソウサマデシタ」

「ひっぱたくぞこの野郎」

焼き鳥つて普段買わないし作らないし食べないけどたまに食べるとめっちゃ美味しいよね。

「ていうかアレどうしたの？ パッケージ見たけど私でも知ってる有名店じゃん」

「あー、明日からちつとばかり長期の仕事入つてな。紹介つつか、斡旋してくれた奴に持たせられた」

「なんで仕事斡旋する側が土産持たせんだよ」

いや単に気に入られたからなんだろうけど。怖いなこの人たらし。マジで私がここに置かなくても普通に生きてけたよなこいつ。

「仕事って?」

「来月から開催される博物館の特別展……の、展示物の運び屋だな。盗難強盗の対策ってことで警備もかねてる。代わりに展示物をじっくり見ていいってよ」

「へえ」

考古学とか一見無縁そうなものにガツツリ興味あんの不思議だわ。そういえばこっちに来る前も遺跡の発掘やってたんだっけか。

「何だよその興味なさそうな顔は」

「興味ないもん。で、どんくらいで戻んの?」

「期間は明日から一週間くらいだな。進捗によっては多少前後する。ってわけでオレがいなくても寂しがんなよ」

「こっちのセリフだボケ。ていうか行く前にヒゲくらい剃れ」

そりゃ見る人が見れば過去の遺物だのオーパーツだのってのはロマンを感じるモンなんだろうけどさ、生憎と私にはそういう感性はほぼない。歴史的発見とか言われてもなーって感じ。せいぜい『世界ふ〇ぎ発見』を画面越しに見てクイズに答えるくらいで十分だ。

「枯れてんなアお前。もつと楽しく生きらんねエの?」

「余計なお世話」

そもそもこの話、いくら楽しくても同じだけの苦しきがあるならそもそも楽しくなんてなくていい。

「……気が変わった」

は？

「やっぱお前も明日来い。オレがロマンつてもんを叩き込んでやる」

「は？」

「言つとくがバックレは無しだ。今すぐ話付けとくからな」

「はあ!？」

意気揚々とどこかに電話を始めるジンの仕事は早かった。「四十秒で支度しな」って某ジ○リの名台詞があるけど、ジンの支度とやらはものの二十秒もかからなかった。

……あのヒゲ全部抜くのと顔の面積が倍になるまで殴るのとどっちが楽に済むかなア。いつそどっちもやるか。どうしようか。

第8訓：大事なものには金と手間を惜しむな

基本的に私の日常はルーティンだ。

決まった時間に起きてご飯食べてぶらついて仕事行って帰って寝る。そんな感じ。バイトの関係でそれなりの変動はあるけど、未成年ってこともあって朝帰りはない。別に夜通しでも私は構わないんだけど、店側に迷惑がかかる可能性もあるからその辺は大人しくしてる。別にそこまで金が欲しいわけでもないし、勤労意欲が高いわけでもないから。

それに何より私自身がコミュ障……ってわけでもないけど特に友達付き合いの出来るタイプでもないの、妹関連でそれなりに仲良くなった人を除いて私自身の友達ってのはそういない。ていうかいらない。神楽と比較すると口数も少なくて無愛想に見えるのは認める。愛嬌は妹に、愛想はバカ兄貴に全部割り振られたのが我が家です。

というわけで、私の日常にイレギュラーはあまりない。たまにはあるけど大体妹というか万事屋絡みだったりお得意様のキャバクラ絡みだったりはたまたそこから派生してストーカーゴリラ……つまりところチンピラ警察が絡みだったりで、大体誰かの巻き添えという形になる。大抵悪い結果にはならないし結構面白いこともあるからそれは

良いんだけど、だからといって自分から首を突っ込む気にはいっただってなれない。

『おかあさん』

『お前のせいで』

『ねーちゃん、パピー次はいつ帰ってくるアルか?』

『……すまねえな』

私たちが何もしくたつて、悲しいことや辛いことは突然鎌首擡げてこつちに食らいついてくる。だつたら敢えて自分から足を踏みいれたりしたくない。そう思うのは別に間違いじゃないと思つてる。この他力本願で流されっぱなしな体質のせいで家族喧嘩で蚊帳の外になりがちなのは……否定しないけど。

「これは?」

「こつちにお願ひします」

不織布のマスクで鼻まで覆っているせいで少しばかり息苦しい。反面こつちに指示を出す職員? 係員? は透明なフェイスシールドをしている。通期性には羨ましいけどフェイスシールドで実は感染予防的には全然効果ないらしいね。

「置くときは細心の注意をお願ひします。状態が悪くて非常に崩れやすいので」

「はーい」

よいしょ、と一抱えもある段ボールをテーブルに置く。あくまで壁やら何やらにぶつ

けないためにかぶせていたボール箱を下から上に引きぬくと、ミイラみたいに全体を白い布？ ビニール？ で巻かれた何かが出てくる。私が少し離れると、一緒についてきたスタッフがそれを丁寧にはどき始める。こういう貴重品ってどうやって運ぶんだろうと思つてたけどこうやってたんだね。

ややあつて完全に包装を取つ払うと、どつかで見たことあるような木製の彫像が出てきた。……うんまあ状態は確かに良くない。下の方がちよつと腐りかけてるし。

「おつ、それがそこならならこれも一旦こつちだな」

「ジン」

これ、とジンが持つてきたのは私が運んだのと同じくらいの箱だった。同じ手順で包帯めいたラッピングを取ると、中身はやつぱり同じくらいの大きさの木像だった。台座も同じデザインで、違うのはモチーフくらい。私が運んだのは大きな鳥で、今出てきたのは兎だ。

「金鳥玉兎像つっーんだと」

「キンウギヨクト？」

「おー。金の鳥と玉の兎、そつちの鳥は本来足が三本あつたらしいな」

「……ほんとだ、もう一本あつた跡がある」

なんかちよつとバランス悪いなと思つてたけどそういうことか。三本あるはずの足の一本は腐つて折れちやつたんだな。

「元々これが収められてた倉庫が権力闘争の都合ウン十年放置された時代があつてよ、そんなときに雨漏りが修繕されなかつたらしい。つたく、これだから美術品だの貴重品はきつちり独立機関作つて管理させとかなきゃなんねーつてのに」

「妙に実感こもつてんね」

「そりゃな。オレが普段どんだけやりがいだけを追い求められる口の堅い変わり者を集めて回つてゐるかつて話だ。最初の土台だけは最低限そういう奴らで固めねえと後でどうにもならなくなるんだよ」

「ぶーん」

「こいつ本当にそういうことでもしてたんだなア……あとこの口ぶりは普段から利権関連で回りとバトつてるクチだな。どつちに同情すればいいのかわからんけど。」

「金鳥は三本足の八咫鳥で太陽、玉兎は月。太陽と月、転じて歳月。そこから更に派生して家系やら国家やらの存続を願うつて意味らしいな」

「なるほど」

「にやつと笑つたジンが、手袋をした手で周囲をぐるりと指さした。

「特にこの時代の王、じゃねーや、將軍つてのはこのモチーフを好んだらしくてな、今回

運び込んだ貴重品の実に四割がこの金鳥玉兔だ。一つのデザインに権力者が固執するのは別に珍しくもねえが、当時の将軍がこれに凝りだしたのは特段内戦も事件もなかった時代だ。まだ天人も来てなかった太平の世にわざわざ大量発注かけてんのはちつと異常だな」

「発注て」

そんな業者みたいな。いやまあ確かに命令して作らせたんなら発注ではあるけども。

「大体どこの国でもな、こういう長寿だの永遠の命だのつて願いを形にするのはそれに時代が乱れてるときだ。例外は当然あるけどな。けど『こいつ』はある時から急にこの金鳥玉兔に凝りだして、やっぱりある時から急にそれをやめてる」

「何かハッキリとした意図があるってこと？」

「さあな。完全にただの気まぐれって線もなくはねーよ」

にんまりと笑みを深めたジンが更に何か言うより先に、外の方から「おいそこサボるな！」という当然のお叱りが飛んでくる。逆光で姿は見えにくいがジンと仲良くなった誰かさんだ。焼き鳥ゴチでしたって言ったら変な顔してたっけ。

「ま、深く知りたかったらまだ付き合えよ。俺も調べたいことあるしな」

鼻歌交じりに歩き出したジンの背中を蹴り飛ばしてやろうか一瞬考えて、やめる。うっかり展示品に当たったら拙いって気を遣うくらいの理性は、一応私にもあったわけ

第9訓：報連相は大事だけど取り返しのつかない報告だけされても困る

「終わった！」

埃っぽくはないけど遮光性と密閉性が落ちる保管室からようやくオサラバ出来たとあって、顔の半分を覆ったマスクをやつとこさつとこ取り外す。

今日の今日まで知る由もなかったけど、人間の呼気や汗、果てはカメラの光でさえこういう古いものを劣化させる原因になるんだそう。博物館や美術館でよく撮影禁止になっているのは、門外不出のなんちゃらよりも寧ろ展示品の劣化防止の意味合いが大きい。知らなかった。そりゃ迷惑系ようつーばーやらてつくとかーやらに目くじら立てるつてもんだよね。

「んじや、オレらは一旦ここでお役御免だな」

「はい。ご苦労様でした」

初日を含めて三日。ジンが最初に言っていた予定の半分以下で終わった仕事の日当はまあ相応っぽい。ジンは現ナマを興味深げに取り出して「こっちの紙幣は質が良いな」と変なところで感心している。

「貨幣に質の差とかあんの？」

「そりやあな。これくらい丈夫なら洗濯機で回しても原型とどめるしそのまま使えるだろ」

「使えるね」

私もうっかりやったことあるからそれは身をもつて知ってる。

「ん、まあ二人分でこんだけありや足りるか。よし行くぞ」

「行くなって」

どこに？ 帰るんじゃないくて？ ……っていう疑問をでかでか顔に書いてたらしい私を、ジンのこのクソ野郎は鼻で笑ってきやがった。

「何言ってるんだ。一週間かそれよりかかるつつつたる？」

「仕事終わったじゃん」

「オレは何も『仕事だけで一週間』とは一言も言ってるよ」

「はあ!？」

おいなんだその屁理屈ふざけんな。

「クソが！」

「おっと残念だったなあ、ご忠告に従って清潔感出してみちまったもんで」

「チツツツ」

ニヤニヤ笑うジンがうざい。マジうざい。

そうこいつ出かけるギリギリになって「おっと忘れてた」とばかりにいつの間にか買ってたらしい髭剃りできっちり無精ひげを剃ってやがったのだ。流石に仕事前だから身なりに気い使ったのかと思ってたんだけどマジのマジで私対策だったらしい。

いやおかしいだろ。何だその労力の使い方。

「むっかつく!!」

「はっはっはっは！ ざまーみろ妖怪髭筆り!!」

「妖怪はテメーだろこのクソ覗き魔！」

「覗いてねえ!!」

クソっ、せめてこいつの顔にこれ見よがしなホクロでもあれば銀ちゃんみたく引きちぎってやるのに……!!

「いやホクロは引きちぎるなよ。ヒゲ抜くのと皮膚を引きちぎるのはちげーだろ」

「うるせーお通ちゃんだって脅し文句に使ってんだからうだうだ言うな」

「誰だよオツウって」

「マジかよお通ちゃん知らねーのかよお前の人生かわいそうな人生だな」

「そこまで言うか???'?」 え、何それお前の推しアイドルかなんかか？」

「アイドルではあるけど別に推しではないかな」

ちゃんと紹介してないし。

……まあいいか別に。

「ところで帰らないんなら何処行くの？」

「今更か」

うるせーバカ。ハゲ。ヒゲ。

「ハゲてねえやつをハゲって言うな。あとヒゲ今生えてねーだろ」

「じゃあバカハゲ」

「残ったの合体させりゃいいってもんじゃねー！ あとハゲでもねー!!」

ぎゃんつと喚くジンはうるさい。人生楽しそうでよかったね。

「で、結局何処いくの？」

ものすごく恨みがましいジト目でこつちを見てくるジンに改めて問えば、ものすごく聞えよがしというかこれ見よがし？ な溜息のあとに「図書館」と答える。

「図書館なら近所にあんじゃん。そこじゃダメなの？」

「蔵書量が全然違エだろ。取り寄せんのも時間かかるし、あとは約束もあつからな」

「約束？」

「そのうちわかる」

いやそのうちじゃなくて今言えよめんどくせーな。ていうか。

「私別に要らなくね？」

ジン個人の調べものやら約束やらなら私いなくてもいいよねどう考えても。仕事自体は終わったし金も貰ったしぶつちやけもう用事ないんだけど。ただでさえ普段のバイトにも穴開けちやってるし。

「何言ってるんだよ。お前がいなきや始まんねーだろ」

「はあ？」

「ロマンを教えてやるつつつたろ」

「……………そうだっけ？」

「ボケたか？」

「殴るぞ」

「言ってから殴んなよ！」

いやまあ覚えてたつつか思い出しはしたけどなんかむかつくじやん全体的に。あとヒゲは今引っこ抜けないのであとはもう拳しかないのは明白。

「手を出さねえって選択肢がねえあたりが野蛮なんだよ……」

「おっと手が滑った」

「いっつて!!」

流石に【練】ありきだとダメージよく通るな。やっぱ念って凄いわ。

第10訓：調べ物をネット検索で済ませるかどうかって割と重要

めんどくさい気持ちを隠さない私を引きずって国立図書館にやってきたジンは、受付奥にいたオッサンに何やら話しかけるとそのまま関係者以外立ち入り禁止の扉に通された。なぜか私を連れて。

こんなどこに何しに来たんだと何度聞いても着けばわかるとしか言わないジンはあれこれと小難しいことをオッサンと喋っており、正直三割程度しか中身がわからない。メインの話題はさつきまで請け負った仕事で目いっぱい運んだ展示物やら、それにつわる將軍やら時代やらの話らしい……んだけど、正直將軍の名前も「なんか聞いたことあんな」レベルでしかない私にはちんぷんかんぷんだ。そもそも地球人ですらない私に江戸の歴史がと言われても困る。

「要するにだな」

よく動く二人分の口元を歩きながら追うのも疲れたので、ちよつとだけペースを緩めて二人の後ろを歩くようにする。すると余計な目端の利くジンはくるつと体ごと振り返り、そのくせ横のオッサンにもぶつかることなく妙にこなれた様子で説明を始めた。

「あの金鳥玉兎にハマつてた四代將軍の徳川綱綱はまあ色男でな、正妻とは十五で結婚したもののあつちの令嬢こつちの姫君、果ては女中に親族の乳母にまで手エ出してた好き物野郎だ。そのくせ誰とも子供は出来なかつたもんだから、結局六十手前になつて従弟の子供を養子に取つてる」

「……ずいぶん詳しいね」

「そーかあ？　ちつと調べたらすぐだぜ」

調べたらすぐでもそれを覚えてんのがおかしいと思うのは私だけ？　いや違ふな、横のオツサンもいやいやつて首横に振つてるし。

ていうかそもそもとして、曲がりなりにも二年この星で暮らしてる私よりも既に知識量でだいぶ先を行つてるジンは真面目にやばいと思う。この半月ちよつとの間にどうやつてそんだけ詰め込んだんだろう。（認めるのはくつそむかつくけど）要するに地頭いいんだろうな……いやホントむかつくけどそこは認めよう。うん。

「綱綱はこの色狂いの性格と動物愛護の行き過ぎた政策で大概の歴史書じや種無しタマなしの暗君扱いだ。治世が長かった割に筆不精だったせいかな直筆の手紙もほぼ無えから人格面も謎。だからマ、後からのさばつた連中にとつちや捏造し放題でえもあるわけだな」

「……將軍家はあつちのサイズも代々將軍級だつて聞いたけど」

『んげふっっ』

オッサンとジンが同時にむせた。飲み物も飲んでないのに器用な連中だ。

「つげほっ、ば、おま……っ、誰から聞いたんだよんな与太話」

「誰って」

將軍本人からですが何か……とは流石に言わんでおこう。たまたま私のシフトが入ってた時に松平のおっちゃんに連れられてキャバクラに来た徳川茂茂、通称将ちゃんの真顔を思い出す。正直あの人が本当の將軍だったことよりもあまりに籤運が悪すぎでそっちにびっくりした記憶がある。最終的には何でか私も王様ゲーム入れられて……うん。

……楽しかったなあ、アレ。不敬罪からの打ち首フラグに引いてた記憶の方が鮮明だけど、出来る事ならもう一度くらい、あのメンバーでくだらない遊びを試してみたかった。

「ま、要するにあれでしょ、サイズがでかくても袋が空っぽなら意味ないっていう」

「いや知らねーよ!? オレは一ミリもんな話してねーからな!？」

「そうだっけ?」

「そうだっけじゃねー!!」

「あー、その、お二人さんもう少しお静かに頼むわ。特にジン」

「いやオレのせいじゃなくね!？」

噛みついてくるジンをどうどうと窘めたオツサンが、「ついたぞ」と何となく嚴重な扉の前に立つ。カードキーと指紋認証とパスワードでやっと開いたその空気は、和紙と墨の香りが立ち込めていた。

「ガード堅エな」

「まあな。徳川将軍家がなくなつてまだ二年、まだこの中のものは責任の所在が明らかになつてないせいで公開も破棄もできない状態だ。ま、後者に関しちや万が一そんな指示が出ようもんなら徹底抗戦するつもりだけどな」

「門外不出つてこと?」

「少し違う。ここのモンは殆どが基本的に徳川家の品位やら何やらを損なうつてんで、時代時代で『なかつたこと』にされてたもんだ。初代の徳川家から最後の徳川喜々にかけての、言つてしまえば『あつてはならない将軍家の恥部』つてやつだな」

「……いいんですか? そんな大事なモンこんなのに見せて」

「おい」

いや見ていいか悪いかで言うとなんか私でも大概だけどさ、そもそも私連れてこられただけだし、興味あるか無いかつて言われたら別にないし。

「はー……」

「なに、その聞えよがしな溜息は」

でかかか「あきれ果てて物も言えません」と書いた表情のジンが胡散臭い海外の通販番組のごとくオーバーリアクションで肩をすくめる。

「ほんつとに情緒の乏しいやつだなオメー。権力のヴェールに阻まれてギリギリ焚書を免れた貴重な資料がこんだけ揃ってるつてのにそのテンションとか本当に血の通った人間か？」

「あんだとこの野郎」

そもそもあんたが勝手に私を引つ張ってきたんだろが！ と。ついいつもの癖で傘を振り上げようとして止まる。そういえば入り口に置いてきちやっただった。くそつ、なんつー不完全燃焼……！

「綱綱が金鳥玉兎に凝ってたのは約30年の治世の中でたったの2年ちよつとだ。その2年の間にあれだけ同じモチーフの像やら掛け軸やらを造らせて、それ以前も以後も同じようなことは二度とやらなかった。能狂なんて呼ばれるくらいハマってた能には死ぬまで力入れてたつてのにな」

「……そりやあだつて、一生ものの趣味と一時的なブームは違うんじゃない？」

そもそも能つてのは一大文化だけど、金鳥玉兎とやらはそれこそただのモチーフといつか縁起物のそれだ。何となくハマつて、何となく飽きた。将軍サマだから規模が一般人と違うつてだけで、その程度じゃないんだろうか。

「それをこれから確かめンだよ」

首をかしげる私にジンはそれしか言わなかった。そして私は訳も分からないまま、ジンの『調べもの』に半日以上付き合わされることになる。

……………やっぱ今度はその無駄に頑丈そうな髪髯つてやろうかな。それか眉毛。